

III 乳腺画像診断のための Web 教育の可能性

1. 精中機構における Web 教育 ——マンモグラフィ部門

白岩 美咲^{*1, 2}/角田 博子^{*2}/篠原 範充^{*2}
宮城 由美^{*2}/坂 佳奈子^{*2}/丹黒 章^{*2}

*1 国立病院機構姫路医療センター放射線診断科

*2 日本乳がん検診精度管理中央機構教育・研修委員会

乳がん検診において、マンモグラフィ (MG) 撮影および読影の精度管理は非常に重要であり、高い精度を保ち、また、向上させるためには、教育研修は必要不可欠である。日本乳がん検診精度管理中央機構 (精中機構) では、MG 読影講習会、MG 技術講習会をはじめとした種々の教育研修事業を行っている。本稿では、新型コロナウイルス感染拡大を契機として大きく変化した MG 読影講習会について、Web 化「した部分」とそのメリット・デメリット、また、Web 化「しなかった部分」についても、その理由や変更点も含めて、講習会の現況として紹介したいと思う。

マンモグラフィ読影講習会のコロナ禍までの変遷

MG 読影講習会は、1999年3月に、精中機構の前身のマンモグラフィ検診精度管理中央委員会 (精中委) 主催で第1回が開催されて以来、現在まで25年近くにわたり、精中委・精中機構主催、共催合わせて500回近く開催されている。また、読影力の維持・向上のために、2007年からは5年ごとの更新制度を導入しており、MG 読影更新講習会も約140回開催されている。2023年6月現在、検診 MG 読影認定医師は1万1151名となっている。

初回の MG 読影講習会開催当時は、MG はアナログシステムで、シャウカステンにかけたフィルムで読影を行っており、講習会でも同様であった。その後、

MG 撮影はアナログからデジタルシステムに、画像表示系もハードコピーからソフトコピー (モニタ) へと変化し、現在では大多数の施設で、デジタル MG をモニタ診断する状況となっている。この変遷を鑑みて、MG 読影講習会でもフィルム・シャウカステンに代わり、2016年4月からは4K タブレット、2018年4月からは5メガピクセルモニタワークステーション (WS) が使用されている。

コロナ禍とマンモグラフィ読影講習会

MG 画像表示システムは前記のとおり変化したものの、MG 読影講習会の開催様式、スケジュール (図1) は、約20年間にわたり大きな変更はなかった。現地での2日間の講習会で、1日目の午後早い時間帯までは座学での全体講義、その後、2日目の午前中まで、7名が1グループとなって、「腫瘍1」「腫瘍2」「石灰化1」「石灰化2」「その他の所見1」「その他の所見2」「画像評価」の7項目について読影演習 (グループ講習) を行い、午後に読影試験を行うというスケジュールである。また、読影資格更新者を対象とした MG 読影更新講習会は、1日の講習会で、最新の情報提供を含めた2時間程度の座学での全体講義、その後読影試験および症例解説を行うというスケジュールであった。

このうち座学での全体講義は、e-learning の昨今の普及に伴い、精中

機構教育・研修委員会においても e-learning 導入につき検討を始めていたが、そのような状況の中で、2020年3月に突如襲来したのが新型コロナウイルス感染拡大であった。

コロナ禍の中で、MG 読影講習会は、全員が医療関係者で全国から集結すること、2日間の長時間の講習会であること、参加者間の距離が近く、会話も多いことなどを鑑みると、一般的な感染防止対策を講じたとしても感染に伴うリスクが低いとは言えず、開催の中止が相次いだ。一方、MG 読影講習会・読影更新講習会は、乳がん検診の場における資格試験の一面も有するため、講習会の長期間の休止は決して望ましいことではない。開催様式やスケジュールの変更も含めた感染防止に留意した MG 読影講習会を早急に構築する必要性に迫られ、精中機構教育・研修委員会 MG 部門では、具体的な検討を開始した。

全体講義の現地講義から e-learning への変更

最初に、コロナ禍前より e-learning 導入の検討途上にあった MG 読影講習会の全体講義6講義および読影更新講習会の全体講義3講義について、現地講義から e-learning への変更を行った (図2)。変更にあたり、「e-learning の視聴環境が整っていない、また、視聴方法がわからない受講者がいるのではないか?」「e-learning をきちんと視聴してもらえる